小学校における英語活動においての歌や絵本の導入·活用について
－実践方法論に沿った実例の提案－

Using Songs and Picture Books in English Activities at Elementary Schools
－Suggestions based on practice－

シャルコフ・ロバート
Robert J. Schalkoff

はじめに

日本全国の小学校においての総合学習が本格的に実施されてから４年が経とうとしていて、英語を正式な科目として小学校に導入すべきかどうかという議論の中、また、日本全国の小学校のおよそ９割以上（中央教育審議会小等中等教育分科会教育課程部会、2006）が総合学習という位置づけで、英語活動を導入している中、文部科学省は未だに具体的なカリキュラムを示せず、各小学校に指導内容及び指導方法を任せている。そこで、現場の小学校教員が試行錯誤で小学生に相応しい体験的な学習方法を探っている。また、各地でそういった教員に対する英語活動についての研修会が開かれている。

本研究者は総合学習が導入される２年前から山口県山口市のある市立小学校で２年間週１回５～６年生を対象にした英語の授業をし、その後、山口県や広島県の各地での小学校で特別教師として英語活動をやり続けてきた。また、約10年前からは山口県・広島県、両県の各市町村主催の現役小学校教員に対する英語活動についての研修会の指導者として活動をしてきた。そして、各地の小学校での校内研修、研究発表会でも、指導してきた。それらの活動の中で、研修会の主催者側からも現場の教員からも指導してほしいという内容についてのさまざまな要望があるが、最近、特に英語活動においての歌や絵本の活用についての要望が多くなった。その要望に答えるため、実践を繰り広げながら、これらのものの活用についての考え方や実践方法が生まれてきた。その中から本研究ノートを通して、最も重要だと考えられる点について記載することにする。

歌や絵本の導入・活用に当たり

小学校における英語活動に歌や絵本を導入する際、いくつか考えなければならないことがある。１つ目は「意味」をどう取り扱うかということである。次に使おうと考えている絵本や歌はどういう活動が適しているかということである。最後に絵本や歌の導入が言語的にどう役に立つか、つまり、使おうと考えている絵本や歌と接することによって児童が英語という言語においては何を習得することができると考えているか、ということである。

１つ目の疑問（「意味」をどう取り扱うか）に関しては、絵本や歌を使う目的について検討する必要がある。すなわち、英語のシャワーを浴びせさせようとしているのか（意味を特別に取り扱わないで、英語の音や雰囲気を味わわせること）、また事前学習や別の教材（絵など）を用いることによって意味を掴んでほしいと考えているか、ということである。また、「意味」を取り上げる際、児童にどこまで理解させたいかということも考えなければならない。例えば、大まかな意味を理解してもらいたいのか、それとも細かいところまで導入している絵本や歌を理解してほしいのか、のどちらを目的にするかによって活動の内容は大いに異なる。

２つ目の疑問（使おうと考えている絵本や歌にはどういう活動が適しているか）については、ある絵本や歌の内容自体からヒントを得てすぐ活動のアイデアが浮ぶこともあれば、時間をかけていろいろなことを検討しなければならないものもある。流れ的に物語になっているものは紙芝居のような活動に適している。また、想像することができるような結末を持つ絵本や歌なら、予測または想定的な活動が可能である。歌の場合はジェスチャーや動きが取り入れやすいものが多いので、楽しくなおかつ有意義な活動ができると考えている。

３つ目の疑問（絵本や歌の導入が言語的にどう役に立つか）については使用する歌や絵本の構成について検討する必要がある。その絵本や歌において全体を通してくり返されている言葉かフレーズがあるかどうか、ページや節ごとに文章か歌詞が変わるのかを見る必要がある。くり返している部分があれば、児童にとっては習得しやすくなり、自分達で歌ったり、言ってみたりするという、いわゆる能動的な活動の可能性が高くなるが、なければ能動的というよりは受動的なリスニングに重点が置かれている活動になるだろう。

実践例

ここで、上に述べた考え方に沿って、本研究者が小学生に対して実際に導入してみて使いやすく、楽しくかつ効果的だと考えている歌や絵本を使用した活動を紹介することにする。３つのカテゴリに分けてあるが、必ずしもそのカテゴリのみに当てはまらない場合もある。

１　意味の取り扱い方：英語のシャワーを浴びせさせる読み聞かせ例

教材は英語圏で大変人気のある絵本作家ドクター・スース（Dr. Suess本名Theodore Geisel）の作品で、「Ten Apples On Top」（Random House, 1961）である。この絵本の特徴は１～10までの数字を大変面白可笑しく取り上げながら、楽しいストーリが展開していくところである。また、絵が大変分かりやすく、言葉を全て理解していなくてもストーリに十分ついていける。その上、出てくる単語の数もそれほど多くなく、繰り返すところも多いうえ、中学生レベルの英語で書かれているので、日本人の学級担任でも練習をすれば読み聞かせできる程度のものである。読み聞かせのポイントは２つ。１つ目は登場する人物（実を言うと動物）に合わせて、教師が声を変えながら読み聞かせる。２つ目は最後の結末に向かうにつれ、読むテンポを少し上げることを加えれば、児童は非常に盛り上がる。英語でのお話しは「面白い」、「楽しい」というような印象を児童にあたえることができる。

意味の取り扱い方：細かいところまで理解させる例

教材はビル・マーティンJRとエリック・カールの代表作と言える「Brown Bear, Brown Bear, What Do You See？」（Henry Holt, 1967）である。日本人にも大変親しく読まれている絵本で、ストーリは分かりやすいし、登場してくる動物や「先生」と「子どもたち」の言い方や色以外は最後まで同じ言葉を繰り返し使っていくところが特徴である。これを利用し、英語での動物の言い方、色の言い方、そして簡単な文章や疑問文を理解させ、部分的に教師と一緒に「読んでいく」または教師の代わりに「読んでいく」ことができる絵本である。読む前の準備としては出てくる動物の絵を見ながら、それぞれの動物の言い方を単数形冠詞の「a」を前に付けながら練習させた後、色を付け加え、「a brown bear」のような言い方を練習していく。[1]その後、身振りをしながら、疑問文の「What do you see？」とそ

[1] 著者の場合は別の活動として積み木のようなものを教材にし、英文法の基本を体験学習的に学ぶ方法の１つであるサイレント・ウェイ方でこのような言い方を同時に指導しているので、児童はスムーズかつ早くにこのような言い方が正しく言えるし、最後のページで登場した動物及び人物を最初から最後まで言う場面での「and」の使い方が分かり、この部分も言い切ることもできる。

の受け応えの「I see…」を理解させる。児童が全ての動物の言い方、色の表し方や疑問文とその受け応えがスムーズに言えるようになってから、教師のリードで読み始める。初めと２番目に登場してくる動物までは教師が一緒に読めば、３番目の動物から本の最後まではほぼ正しく児童自身が教師なしでも言えることになる。ただし、一つの問題点として指摘できるのは動物の言い方が疑問文と受け応えによって微妙に変わることがあるので、注意をしなければならない。というのは疑問文においての動物の言い方は動物を表す単語のみで固有名詞的（Brown bear, brown bear, what do you see？）、つまり名前のような呼び方をするが、受け応えの場合は登場する動物を一般的な言い方、つまり単数形の冠詞を付けて言う必要がある（I see a red bird）。このため、最初の部分においては教師と必ず一緒に読むことが必要である。

2　適している活動：簡単な英語劇ができる例

教材は日本でも親しまれている「大きなかぶ」という民謡が絵本になっているもの（Labo Teaching Information Center）である。日本語訳とそれほど変わらないストーリであるため、理解度が最初から期待できる。この内容は劇化するには大変やりやすく、練習なし、いわゆるインスタント劇がその場でできてしまう。最初は読み聞かせのような始まり方をするが、最初から子どもを巻き込みながら劇にしていくことがポイントである。第一場面を読みながら、登場してくる「おじいさん」を身振りで募集し、その「おじいさん」に同時に登場してくる「おばあさん」を決めてもらい、その「おばあさん」に「かぶ」になる人、第一場面ではまだ「タネ」である人を決めてもらう。その後、「おじいさん」が「タネ」に水を撒くと、しゃがんでいた「タネ」が大きくなる。「おじいさん」は気がついたら、その「かぶ」が自分より大きくなり（「タネ・かぶ」を演じている児童をいすの上に立たせることにより、そうなるようにする）、引っ張り出してみたくなる。大きくなりすぎた「かぶ」は動かないので、第一場面で決めておいた「おばあさん」を再び呼び、手伝ってもらうが、それでも動かない。今度は「おばあさん」に自分の「孫娘」を決めてもらい、話しは進む。前の人物に次の動物を決めてもらいながら結末まで進む。劇としてやっているので、教師がそれぞれのセリフや動物の鳴き声を大げさに読むと同時に登場する人物などに大げさな振り付け（ジェスチャーなど）をさせることにより、かなり盛り上がり、児童が難しいセリフを暗記することなく英語劇を体験できることがポイントである。

適している活動：黒板に貼ってある絵を使う例

教材は英語圏でよく親しくまれているナンセンス・ソング（内容が大変可笑しく、子ども向きの歌で、キャンプファイヤーなどでよく歌う歌）である「There was an Old Lady Who Swallowed a Fly」（ハエを飲み込んでしまったおばあちゃん）である。この歌の内容はある年寄りの女性が理由は不明だが、ハエを飲み込んでしまい、それによって死ぬかも分からないというところから始まり、そのお腹の中のハエを捕まえるため、今度クモを飲み込む。次はそのクモを捕まえるため、鳥を飲み込み、その鳥を捕まえるため、今度は猫を飲み込む。このようなことが最後に飲み込む馬まで繰り返しを続けながら続き、メロディーも大変親しみやすい。この歌の内容からヒントを得て、事前に用意したそれぞれの動物等の絵を描いた紙（裏側に磁石が貼ってある）を使いながら登場してくる動物等を全部歌の例と同じように言い方を練習させながら、一つずつホワイト・ボードの両縁に貼っていく。そして最後にかなり大きく書いてあるお腹の部分が切り取ってある、つまりドーナツ状態となっているおばあさんの絵を同じホワイト・ボードに貼り、「an old lady」という言い方を練習させる。その後、動物等の言い方を復習しながら、適当に児童にそれぞれの動物等の絵を配る。そして、教師が歌を始める。ここで、最初に飲み込むハエの部分とその２番目のクモ以外の部分を除き、児童達に次に何を飲み込むかを考える時間を数秒を与え、答えが出てきた時点でその言ってもらった動物等を付け加えながら歌っていくことがポイントになる。子どもにとっては分かりやすい順番となっている（大きさ

的にも一般的に考えても天敵である動物同士において歌詞の順番が決まっている）ので、児童全員が参加しやすい活動になる。また、それぞれの絵を持っている児童たちにおばあさんの絵まで来てもらい、喉を通すような動作で口からお腹へ絵を動かし、捕まえるために飲んだ動物のそばに貼っていきながら、教師が大げさに飲み込む音を鳴らすと雰囲気が盛り上がる。また、歌詞は最初から最後まで同じような表現が繰り返されているため、新しく登場した動物の言い方だけを付け加えれば児童が簡単に歌えるようになるので、最後になったら、歌のほとんどの部分を英語で歌えるようになる。

3　言語学習的な活動：繰り返しを効果的に使う例１

教材は「Five Little Monkeys Jumping on the Bed」（Clarion Books, 1989）という子どもに親しまれている英語圏の歌をEileen Christelow作家が絵本化したものです。内容はお母さんの猿が５匹の子猿に対して、寝るように言うが、子猿はベッドに入らず、ベッドの上を飛び回る。そうしているうちに１匹の子猿がベッドから落ち、頭を打ったため、お母さんの猿がお医者さんに電話をする。お医者さんからの一言の「ベッドの上を飛び回るのを止めなさい」でワンフレーズが終わる。今度はこのパターンを繰り返しながら子猿が１匹ずつベッドから落ち、お母さんとお医者さんに怒られながら、皆が落ちてしまうまで続く。活動としては読み聞かせに似ているが、２匹目からは少しずつ児童たちに話しを言わせていく。絵本化した歌だが、最初の１～２ページの部分は作家のオリジナルである（５匹の子猿が寝る前の様子が描いてある）ので、このテキストを覚えるため、数回読み聞かせる必要はあるが、飛び回り、落ちるということが繰り返していくように、それを表す英語のセリフも繰り返していく。最後になったら、児童がほぼ完璧に言えるようになる。

言語学習的な活動：繰り返しを効果的に使う例２

教材は世界中に大変よく親しまれているビートルズのヒット曲「Hello, Goodbye」である。この歌の特徴は最後までところどころ目的語のみを変えながら、ほぼ同じような表現を使っていくことである。活動は最終的にこの歌の歌詞を児童全員が覚える、言える、そして歌えるようになることである。そのため、いくつかのステップを踏まえ、歌詞を覚えていく。まず、TPR法[2]で歌に出てくる代名詞、動詞や目的語をジェスチャーを付けながら、それぞれある程度習得させる。今度はこのジェスチャーを児童に示しながら、歌詞の文章を一つずつ作っていく。覚えるために黒板やホワイト・ボードに言葉の数を表す下線を引きながら、それぞれの文章で構成していく（繰り返す部分をすべて書き取ると覚えなくてはならない量が多く見えてしまうので、繰り返す部分については一回しか書かないことがポイント。言わせたり歌わせる際に指でその部分を再び示せばよいのである）。[3]各文章が出来上がる度に、最初から練習させる。練習をさせる際、教師が歌詞を言わずにジェスチャーのみで思い出させる役になる。そして、覚えるためのコツとして、児童には必ずジェスチャー付きで英語で言わせ、練習をさせる。言い方が大分できて、ある程度の速さで言えるようになってから、事前に用意しておいたCDを突然かけて、指で追いながら歌に合わせて児童に歌詞を言わせる。終わったら、今度は躓いた部分を取り上げながら、児童がその部分を少しずつスムーズかつ早く言えるようにさらに練習をさせる。次はまたCDを再生し、１回目と同じように教師が指で追いながら、児童が歌詞をジェスチャー付きでリズムに合わせて言うようにする。このことを何回か繰り返しながら、歌の歌詞を身につけさせ、今度はメロディーに合わせて歌ってみるところまで持っていく。[4]

---

[2] James Asher氏が開発されたTotal Physical Responseの略。TPR法の特徴は教師の学習目的言語での指示を聞きながら、体等を動かすこと。こういう活動の繰り返しにより学習者が目的言語を習得し、聞いてきた部分を最終的に言えるようになる（Larsen-Freeman, 2000）。

[3] 言葉の繋ぎなどは下線を繋ぐことにより、教師が物事を言わずにスムーズに言わせることができる。

[4] 完成した歌を校内研修会及び音楽会で披露すると参観された方々が感動されると思う。

言語学習的な活動：リスニング及び発音練習の事前準備と前置詞を取り上げる例

教材は実例１にも取り上げていたドクター・スースの別の作品で、「Green Eggs and Ham」(Random House, 1960) という絵本である。この絵本も語彙がやや少なく、英語の独特な発音を取り上げながら、英語圏の絵本によく取り上げられる押韻を用いる作品でもある。押韻がある関係上、リズムはとても良く、ネイティブ[5]にとって読み聞かせしやすい本である。この絵本のもう一つの特徴は英語の独特な前置詞もたくさん取り上げていることである。その上、絵から前置詞の使い方が大変分かりやすい。内容は主人公がサムという人物から勧められた少し変わった食べ物（緑色のハムと緑色の卵）を一度断る。すると次から次にサムが主人公にどんな場面なら食べられるかと聞き続けるという大変ユニークな内容になる。活動だが、ここまで取り上げた他の絵本や歌と比較したら、やや長めのストーリとなる。また、繰り返すところもやや多いが、文章が長いため、児童にとってはすぐに覚えられるような長さではない。よって、英語のリズムや押韻を少しアクティブな読み聞かせ的な活動を通して体験させることになる。ここで、本の中に度々でてくる語彙や動詞[6]を手書きの絵を使いながらそれぞれの言い方を紹介する。そして、その絵を児童に適当に配り、教師が読みながらそういう言葉が話しの中に出てくるたびにその絵を持っている児童がその絵を高く上げ、他の児童がこの絵を指す。これらの活動は簡単そうに聞こえるが、上に述べたようにこの絵本のテキストのリズムが大変よいため、読むテンポが速いので、児童が真剣にならないとついていけないほどの大変な作業になり、よいリスニング練習になる。

終わりに

以上、最初に「歌や絵本の導入・活用に当たり」に述べた考え方に沿って実例を7つ取り上げたが、こちらで紹介した活用方法以外の可能性もたくさんあるように思われる。述べた通りに実践してみるという活動から始まり、工夫をしながら自分のものにしていくことが大変有意義な活動だと思われる。また、ここでとり上げた絵本や歌の歌詞を実際に手に取ってみられ[7]、ここで述べた実例からヒントを得ながら児童たちに見合った新たな方法を開発されることに繋がると幸いである。

参考文献

中央教育審議会.（2006）.小等中等教育分科会教育課程部会（第39回）議事録・配付資料（資料２－２）. Retrieved 12/4/2006 from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/004/06040519/002-2/001.pdf

Larsen-Freeman, D.（2000）. Techniques and Principles in Language Teaching. New York: Oxford.

[5] 英語を母語とするもの。

[6] 主としてはgreen eggs and hamとそれらのものを食べてみる場面的な言葉、例えばhouse, box, boatなどとその場面で一緒に食べてくれる相手の動物などの言葉、例えばmouse, fox, goatなどのような語彙及びlikeとeatという動詞になる。

[7] 著者権の関係上、絵本のテキストや歌の歌詞の引用を遠慮した。内容や文章についてもっと詳しく知りたい方は是非購入等の方法で手に入れてみてください。

Using Songs and Picture Books in English Activities at Elementary Schools
－Suggestions based on practice－

Robert J. Schalkoff
(Teaching English to Speakers of Other Languages)

These notes put forth three principles to guide teachers in their use of songs and picture books in English activities at the elementary school level in Japan. Specifically, the author suggests that when using songs or picture books as the basis for English activities the teacher must consider how meaning will be dealt with, what kind of activities the type of text or song lends itself to and finally, what linguistic effect we can expect from the use of certain texts or songs. 7 examples of how to use 5 English picture books and 2 English songs at the elementary school level are given based on these considerations.